

アルゼンチンにおけるポルトガル教育と ブラジルにおけるスペイン語教育

水 戸 博 之

キーワード：スペイン語、ポルトガル語、外国語教育、異文化コミュニケーション、アルゼンチン、ブラジル

0.

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号 19520486「近親言語ポルトガル語・スペイン語間の移行教育と教授法（研究代表者：水戸博之）」H19-H21 の研究成果報告の一部である。本研究は、当初、近親関係にあるポルトガル語とスペイン語の特に口語における共通点と相違点を、比較言語学のみならず日本人学習者を取り巻く文化社会環境にも配慮した社会言語学的観点から体系的に評価することにより、もう一つの言語あるいは両者を効率的かつ正確に学習する方法論および教授法を確立することを通じ、これら 2 言語と文化への理解に寄与することを意図としていた。

実質 2 年半の研究期間（平成 19 年 10 月 - 平成 21 年 3 月）、筆者および 2 連携研究者：重松由美（初年度、共同研究者）、西村秀人（第 2 年度から参加）から構成される 3 名の研究体制により実施された。後述の様に、初年度の現地調査の後、調査対象地域の実情に対応した研究計画の見直しを行った。他方、経済危機そして新型インフルエンザの流行等の困難にも見舞われ計画の遂行が危ぶまれることもあったが、最終的には、合計海外調査 4 回と数回の国内調査を通じて、各研究者が専門とする分野で数多くの新しい知見が得られた。

研究成果の概要および成果の得られた主な項目は次のとおりである：

アルゼンチンおよびウルグアイにおけるポルトガル語教育とブラジルにおけるスペイン語教育の共通点と相違点、2 言語の混成的あるいは中間的形態であるポルトニョールと 2 言語相互の言語干渉、ブラジルとアルゼンチン・ウルグアイの南米南部地域 2 言語文化における音楽文化の伝統の継承と相互交流による新たな創作活動、滞日経験を持つブラジル人子弟と在日ブラジル人子弟の言語学習環境および言語使用。

なお、以上の研究データに基づき、移行教育と教授法の実践的応用として、主に日本人スペイン語既習者を対象にしたポルトガル語教材の試作が行われた。

筆者が主に担当した分野は、アルゼンチンとブラジルにおける対象 2 言語教育機関および制度の比較研究である。¹ 海外調査は、2008 年 2 月 19 日から同年 3 月 2 日まで、ア

ルゼンチン共和国ブエノスアイレス市において、ポルトガル語教育の現状に関して行った。²

1. アルゼンチンにおけるポルトガル語教育

1. 1 歴史的背景と現在に至る経緯

アルゼンチンにおけるポルトガル語教育の歴史は、ブラジルとの二国間関係の推移と変化を反映しているといえる。1991年にブラジル・アルゼンチン・パラグアイ・ウルグアイ南米4カ国によりアスンシオン条約が締結され、メルコスル（南米共同市場）結成といった地域統合の動きが活発になるまでは、外交的・軍事的に相互に高度な緊張感が常に存在し、国境を接する隣国でありながら、心理的にも文化的にも疎遠な関係であった。³

ポルトガル語教育に関しては、1935年、当時のブラジル大統領ジュットリオ・ヴァルガス（Getúlio Dornelles Vargas, 1885-1964）のアルゼンチン訪問を機に、Instituto de Enseñanza Superior en Lenguas Vivas “Juan Ramón Fernández”（詳細は後述）においてポルトガル語講習が行われたことが、現在に直接つながる系譜の嚆矢となるようである。⁴ 両国接近のアルゼンチン側の事情としては、当時のフスト大統領（Agustín Pedro Justo 在職 1932-1938）が1933年にブラジルを訪問し、ブラジルとの通商関係の強化を試みていた。⁵ ヴァルガス政権は、ポプリスモの代表例とされ文化史上も特異な位置を占めるが、ポルトガル語の国外への普及に関し、いかなる理念を持っていたか興味あるところであるが、詳細は今後の課題である。⁶

その後、軍政期までの約半世紀間のアルゼンチン教育におけるポルトガル語は、教育制度の中の一言語の位置は占めつつも、必ずしも重点語学とは認識されていなかったようである。次の3つの事項が記録されている。1940年代前半に、中等教育科目に加えられる。1954年、教員養成課程が創設される。1970年代になって、ブエノスアイレス市の中等教育機関で選択第2外国語に加えられる。⁷

70年代から80年代半ばまでの社会的・政治的混乱期に関しては直接引証可能な資料が見いだせなかったため不明であるが、上述のように、地域統合の意識が高まった90年代からの学習者および教育機関数の増加は飛躍的であった。2000年代の前半において、すでに注目を集める規模に発展していた。72語学センター、4423名受講者（la Revista Idiomas 2000年12月）；アルゼンチン全国で70以上の私立語学学校において開講（Clarín紙 2003年12月）。⁸

「2. ブラジルにおけるスペイン語教育」においても再度近年の状況について言及するが、両国の国会による法律の制定や文部科学省の議定書により、両言語の学習が相互に正式な形で奨励促進されるのは、2000年代の半ばになってからである。ブラジルとアルゼンチンのスペイン語およびポルトガル語教育に関する議定書は、2005年11月30日両国

教育相によって調印された。1985年当時のサルネイ大統領(José Sarney de Araújo Costa, 在任 1985-1990)とアルフォンシン大統領(Raúl Ricardo Alfonsín, 在任 1983-1989)の間で制定されたブラジル・アルゼンチン友好の日(Dia da Amizade Brasil-Argentina)調印20周年を記念したものであった。⁹

その後、2007年に2国間の友好の日記念事業の一つとして、ブラジルとアルゼンチンに、さらにメルコスルの加盟国であるパラグアイとウルグアイの代表を加えた「セミナー：第2言語としてのポルトガル語とスペイン語の教育と資格認証制度」が開催され、制度の詳細が決定された。¹⁰ アルゼンチンにおいては、2009年から法令25.181によって、国立中等教育機関において、外国語としてのポルトガル語教育が義務化された。また、この法令では、ブラジルとの国境地域の州においては初等教育から導入するとされている。¹¹

アルゼンチンにおけるポルトガル語教育の制度化は、後述するブラジルのスペイン語教育と比較すると、国や公的機関が主導したというよりも、急速な普及の追認によって進行した印象が否定できない。こういった点にも2つの言語の国際社会における位置が反映しているといえるであろうか。その帰結として、アルゼンチンでは、2000年代の半ばにおいて、すでにポルトガル語教員に対する急速な需要の増大と教員不足、教員の養成が緊急の課題となっていた。例えば、Clarín紙2005年4月17日には、学校のみならず企業、個人の学習者から、ポルトガル語を教授する教員の需要が日々増大しつつある記事が掲載された。この時点ですでに、ブエノスアイレス市の公立学校9校がポルトガル語を正規のカリキュラムに導入し、初等教育のポルトガル語教師の新聞求人広告数が100倍(レトリックではなく実数か?)に増加した。¹² 記事は多くの理由を列挙している。ブエノスアイレス市の多言語学校プログラム校の40パーセント以上が英語に加えポルトガル語を採用。¹³ 近年国境地域にバイリンガル校が多数開校。ブラジルとの通商関係の拡大による企業からの教師の需要。これら以外に全国で6,000人以上の個人の学習者、等。以下、主要な3つの教育および教員養成機関(Lenguas Vivas “Juan Ramón Fernández”; FUNCEB; CUI 詳細は後述)の関係者の談話が掲載されているが、いずれも社会的需要と急激な受講者の拡大、それに教員の養成が対応しきれない状況が語られている。この傾向は、その後も継続し、2008年10月20日のInstituto Camões(IC:カモoins協会)ブエノスアイレス支部の記事は、2000年代初頭の経済危機を回復した後、ブエノスアイレス大学の非正規コースの学生が倍増したこと、フランス語を抜き英語に次いで需要の多い言語となったことなどを報じている。¹⁴

1. 2 ポルトガル語教育機関

筆者が直接訪問し、関係者と情報交換した機関は、次の2つである。

1) Centro Universitario de Idiomas de la Facultad de Agronomía de la Universidad de Buenos Aires (ブエノスアイレス大学農学部大学言語センター：以下略称 CUI) www.cui.edu.ar (2011/06/06 以下カッコ内の日付は最終アクセス日)

一見すると奇異な印象を与える機関であるが、組織の沿革を留めた名称であり、さらに高等教育における外国語教育の位置づけを考える上で示唆に富む活動を展開している。2008年の時点で、開校から15年程度の歴史ながら、日本語を含む13言語(2011年では15言語)を組織的に開講し、短期コースや企業からの委託授業も含め2万人以上が受講するラテンアメリカ最大の外国語教育機関へ急速に発展して行った。¹⁵

名称に「農学部」とあるのは、次の歴史的経緯からである。1世紀以上前の話から始まる。そもそもヨーロッパ系の伝統的な部局組織の大学では、外国語科目が存在しなかった。19世紀の後半から、外交通商上の必要性から、多様な言語の専門家を養成する機関が設置された。アルゼンチンにおいても20世紀の初頭、当時の教育大臣の名前を冠した外国語専門学校が開校し、現在に至っている。アルゼンチンの大学は、1983年の民政回復後、1990年頃から様々な制度的な見直しが行なわれ、国際化への対応を試みてきた。中でも重要な課題の一つが、外国語教育をいかに大学組織の中に組み入れ、グローバリゼーションという国際化に対応するかであった。ブエノスアイレス大学では、当初、各学部が言語教育センターを別個に開設し、外国語教育を行っていた。それらの中で、運営に最も成功したのが農学部(Facultad de Agronomía)であり、後に経済学部(Facultad de Ciencias Económicas)の組織と連携する。

CUIのもう一つ重要な活動として、海外へのスペイン語の普及である。特に、中国との交流は目覚ましいものがあり、2008年に筆者が訪問した時点で、100名程度の規模の学生を組織的に受け入れ、他方、中国の大学へ教員派遣を含む学术交流をすでに締結していた。当時発行されていた学校案内のパンフレットの記述言語が、スペイン語、英語、ポルトガル語、そして中国語(普通話)であった。さらに、関係者の名刺はスペイン語、英語、中国語の3言語で表記されていた。

ポルトガル語教育に関しては、先述のクラリン紙2005年4月17日記事によると、90年代終わりにはすでに1,800名を受け入れており、ルーラ政権誕生とメルコスルの活性化で、当時、四分の一学期毎に2,400名以上が学習していた。ここでも教員の確保と学習の場の提供が課題となっていた。

CUIのカリキュラム

コースの名称は次のとおり明確にメルコスルの存在を前提としている。

Estudios Superior de Português Programa Mercosur (Mercosul)

4段階の課程(Ciclo)があり各課程は2ないし3のレベルに分かれている。課程修了

者にはディプロマが発行される。¹⁶ 授業は3コースの形態がある。通常コース (Cursos Regulares) は1時間半の授業が週2回または3時間授業が週1回で16週、集中コース (Cursos Intensivos) は3時間授業を週2回で8週、いずれも総時間48時間である。また特別コース (Cursos Especiales) は通常コースのように週1回または2回で8週間、総授業時間24時間である。

授業内容は、後述のブラジル文化センター (以下、FUNCEB) が主宰する CELPE-Bras (Certificado de Proficiência em Língua Portuguesa para Estrangeiros) 外国人のためのポルトガル語能力試験に対応している。FUNCEB とは人的交流をはじめ密接な協力関係があり、ブエノスアイレス FUNCEB がスペイン語話者を対象に開発した教材 “Um português bem brasileiro” 6冊を初級2課程で使用している。

さらに、関連した組織として、次の専門家養成機関が設置されている。

CAFI (Centro Académico de Formación en Idiomas) www.cafi.edu.ar/home.asp (2011/11/13)

英語、仏語、ポルトガル語の3外国語を対象とし、スペイン語との双方向の通訳および翻訳の理論や技術を学ぶ。国際語としての地位がすでに確立している英仏語とともにポルトガル語が含まれていることが、地域の状況と需要を反映している。この機関は、通訳養成 (Tecnatura superior bilingüe) と翻訳者養成 (Traductorado técnico-científico y literário) の2コースからなり、各3年課程で、修了者は公的資格が取得できる。なお、CUIの修了者は入学試験が免除される。

筆者は、CUIセンター長、ポルトガル語科主任およびスペイン語科主任と、アルゼンチンと日本における外国語教育に関する各人の現状認識と課題について意見交換し、さらにポルトガル語教育について、スペイン語話者を主たる受講者とした初級授業参観を行った。¹⁷ 他の言語を含む全ての授業に一貫した特筆すべき点は、第一に、ポルトガル語は希望者が多いため若干超過していたが、20名未満の少人数教育が中心という方針を徹底していたことである。少人数対面授業重視は、例えば、たまたま筆者の見学した外国人向け初級スペイン語授業が対象であったが、各言語主任 (coordinador/ora) が、主に若手教員が対象であるが直接授業を視察し授業評価を行い、授業改善のアドバイスを組織的定期的実施していたことにも表れている。なお、各言語主任は授業評価をはじめクラス編成等教務事務に専念するため在任中は授業担当をしない規定とのことであった。CUIは、2008年当時、すでにマルチメディアによる自習や補習のシステムを積極的に導入し、さらに英米系出版社とともに独自教材の開発も行っていたが、あくまで中心は少人数対面授業であるという姿勢は、言語教育とは何を目指し如何にあるべきかを筆者自身問い直すよい機会であった。

ポルトガル語・スペイン語各主任との懇談の中で、言語環境の如何にかかわらず、当初筆者に共通かつ永遠の問題と思われたことは、母語話者教員と非母語話者教員との連携である。ただし、スペイン語話者に対するポルトガル語授業は、かつてブラジルにおけるスペイン語授業においても経験したことでもあるが、ほとんど翻訳というプロセスを踏まなくとも、いくつかの注意すべき語句を除き、理解可能という前提での議論である。現地においても口頭表現能力と文法力のバランスのとれた向上が目標である。一見平凡な内容であるが、スペイン語が公用語であるアルゼンチンにおいて、近親言語間の母語話者教員と非母語話者教員の協力関係を機能させるには、次の二つの課題が重要な要素となる。第一に、上述のようにポルトガル語学および教授法を体系的に学んだ教員の養成が緊急の課題である。筆者の知る限り、スペイン語圏における学術的批判に耐えうるポルトガル語研究の歴史は半世紀程度であり、決して長いものではない。当然のことながら辞書は2言語の単語を併記対照したものに留まり、教授法や学習法も経験則以上となるのは困難である。¹⁸第二の課題は、ブラジルの文化や社会をどのように授業で扱うかである。この問題意識は、研究プロジェクトの第2年次からの方向に大きな修正を与え、文化的要素に重点を置く契機となった。近隣諸国の文化や社会の取り扱いは、遠隔地と比較し情報量が豊富である一方で様々な慎重な配慮が必要となることは、日本とアジア諸国の関係を考えても明らかなことであるが、アルゼンチンとブラジルという二国間関係は、通商関係や様々な人的交流が盛んになっても、二つの言語文化の関係から眺めてみると、結局、対等の双方向にはなりえないであろうということである。すなわち、大半のアルゼンチン人にとってポルトガル語を学ぶことはブラジルの言語と文化を学ぶことを意味していても、ブラジル人にとってスペイン語を学ぶことは同様な水準でアルゼンチンを学ぶことを意味しない。またこのことは、スペイン語対ブラジルという本来異なる領域の事柄が言語文化学習の段階では同一の次元で対応することでもある。ヨーロッパ系のポルトガル語研究者には、非常に抵抗感を覚える所見となろうが、筆者が訪問した2008年2月から3月の時点で、数多くのポルトガル語教室のポスターを地下鉄構内や市内で見かけたが、ポルトガルのイメージは見いだせなかった。日本において、しばしばポルトガル語の代わりに、需要の大半がブラジル志向を意味する「ブラジル語」という呼称が使用されるが、筆者には、それ以上に隣国としての大国ブラジルの存在感を象徴する出来事に思われた。両言語母語話者教員、ここではむしろ両国出身の教員というべきであろうか、両者の連携には多くの難しい課題が内包しているといえよう。

2) [Fundación Centro de Estudios Brasileiros](http://www.funceb.org.ar) (ブラジル研究センター 以下、FUNCEB)
www.funceb.org.ar (ブエノスアイレス・センター2011/06/13)

1954年、Centro de Estudios Brasileiros (CEB: ブラジル研究センター) の名称でポ

ポルトガル語やブラジル文化の普及を目的に開設され、1996年現在の FUNCEB に改組される。同趣旨の機関は世界 12カ所（以下、2008年3月時点におけるブエノスアイレス FUNCEB の HP によるデータ）に設置され、ブラジル外務省または在外公館の管轄下にある。¹⁹ ポルトガル語教育半世紀の経験の蓄積があり、上述の CUI とともにブエノスアイレスにおける代表的なポルトガル語教育機関の一つである。

FUNCEB 主催ポルトガル語コースは、3段階（Ciclo inicial, Ciclo intermedio, Ciclo avanzado）各段階 2 レベル（1 レベル 54 時間）から構成され、全過程を 3 年で修了する。最上級のレベル 6 修了段階でブラジル大使館が認証した（avalado）ディプロマが授与される。ここでも少人数教育が徹底され、1 クラス最大 12 名と規定されている。2008 年のデータであるが、ブエノスアイレス FUNCEB では、ポルトガル語 87 コースを開講し、年平均 1479 名が受講（1400-2000 名）している。なお、受講者の半数が初級者レベルである。

また、外国人のためのポルトガル語能力試験 CELPE-Bras（Certificado de Proficiência em Língua Portuguesa para Estrangeiros）のブラジル国外における主宰機関の一つであり、1998 年第 1 回試験から、アスンシオン、モンテビデオとともに実施している。アルゼンチン教育省は 2004 年に公的資格として認証した。日本でも京都外国語大学で行われている。

2004 年までのブエノスアイレス FUNCEB では、CELPE-BRAS 約 160 名毎年合格し、1998 年から 2004 年までの合格者累計は 782 名である。なお、CELPE-BRAS 2004 の地域別合格者数は、ラテンアメリカ 3227 名；欧州・アフリカ 197 名であった。

さらに FUNCEB の活動には、公教育における教授資格（A-1380）を与えるポルトガル語教員養成コース（Profesorado de Portugués; Incorporado a la enseñanza oficial）があり、3 年コース（初等教育および義務教育）または 4 年コース（中等教育）の教職課程を開講している。その他、ブラジル人対象のスペイン語コースや、ポルトガル語が入試科目に加えられたことから、2007 年 2 月から、ポルトガル語の予備知識の無い受講者のための入試準備コースを開講している。

2008 年 2 月、ブエノスアイレスのポルトガル語学習熱を反映して、地下鉄駅構内に FUNCEB 主催ポルトガル語コースの大判ポスターが多数掲示されていた。

3) Instituto de Enseñanza Superior en Lenguas Vivas ‘Juan Ramón Fernández’（ファン・ラモン・フェルナンデス近代語高等教育機関）

<http://www.lenguasvivasjrf.edu.ar/>（2011/06/10）

先述のように、ポルトガル語教育を公的教育機関としては最初期 1935 年に実施した。一般に Lenguas Vivas と通称される。ギリシア語やラテン語といった「死語」である古

典語ではなく現在も使用される英仏独など「近代諸言語」を専修する高等教育機関という意味である。沿革は、1904年に、第2次ロカ政権（Julio Argentino Roca 在任 1880-86, 1898-1904）の教育相 Juan Ramón Fernández により設立された。²⁰ 設立者の名前を機関名に冠し現在に至っている。1994年に国の機関からブエノスアイレス市の運営となる。英・仏・ポ・独の4学科を持ち、初等・中等教育から成人を受講者とした教授法の研究と教員養成を活動の中心にしている。翻訳者養成課程を併設。

CUI や FUNCEB とともに、主要なポルトガル語教育機関であり、Instituto Camões (IC: カモインス協会) ブエノスアイレス支部が置かれているが、筆者の準備不足のため直接訪問し情報収集することはできなかった。

この機関の修了生が教員の主体となった語学学校も開設されている。

Asociación ex alumnos del Profesorado de Lenguas Vivas 'Juan R. Fernández' (フアン・ラモン・フェルナンデス近代語教員課程卒業生協会)

<http://www.aexalevi.org.ar/> (2011/06/13)

1916年創立で、英・仏・ポ・独の4言語の教育を行っている。教育の注目すべき特徴は、受講者を年齢別にグループを分け、各コースが開講されていることである。例えば2011年開講の英語の未成年者コースは、niños 6歳から10歳、preadolescentes 10歳から14歳、jóvenes 12歳から17歳の3年齢層に分けられている。約1世紀の教育経験の蓄積といえる。また、ここでも少人数教育は徹底しており、1クラス6あるいは8名以上であれば開講する方針をとっている。

2. ブラジルにおけるスペイン語教育

2007年以降は、ブラジルとアルゼンチンとも2言語学習が制度的に確立し、名実ともに相互交流と協力を通じた教育学習環境の整備が、相違する諸条件を克服しつつ地域統合の深化と並行して進んでいくと考えられる。²¹ ところで、上述のように、言語に関する約80年の2国間の歴史において、真の意味で関係が活性化したのは、ここ20年程のことである。そして、筆者の理解では、政治家がイニシアティブをとった公的制度的な整備の動きが先行していたのはブラジルであったと思われるが、現在とはかなり異なった環境や雰囲気、さらにはスペイン語圏からの視点とはかなり異なった温度差のようなものが見られた。ここでは、本課題に先行しておこなった研究である、それ以前の1990年代後半のブラジルにおける状況について概略を述べ、筆者が収集したマニュアル等出版物のその後の変化について、いくつか考察を述べたい。

ブラジルにおけるスペイン語教育に関する2000年期以前の大きな出来事としては、1998年8月11日に上院が2003年までに全国の中等教育で義務化する決定をしたことである。²² 上述のように、全国的な実施にはさらに時間を要する事になるが、それまで、

スペイン語圏に対してともすれば防衛的な姿勢が感じられた言語文化政策を考慮すれば大きな転換であった。²³

積極的な上院議員の動きの一方で、ブラジルのメディアを代表する *Veja* 誌 (1998/09/09, p.106-p.107 Fernando Luna 筆) の当時の反応は、2011 年の現在読み直してみると、世界語として、またブラジル国内において急速に需要が拡大しつつあるスペイン語の重要性を認めつつも、いささかシニカルな印象を受ける。記事のタイトルからして “Olha! Vizinhos! (ご覧! ご近所さんだよ!)” である。サブタイトルは「数世紀の隔たりの後、ブラジルはイスパニア文化に再び目を向け始めた *Depois de séculos de distanciamento, Brasil volta seus interesse para a cutlura hispânica*」。記事の書き出しが、16 世紀に地球をポルトガルとスペインとで二分しようとしたトルデシリャス条約の *Linha imaginária* (想像上の線) によりブラジルが他の南米地域から分離した、である。疎遠の関係が数世紀続き、7 年前、メルコスルの誕生が古いチョークの線を消すのを助けた。その次に、ようやく本題に入り、上院のスペイン語義務化法案が古い貿易協定が放置していた障壁、すなわち言語、を除去する準備になる、という話の導入の仕方である。²⁴

今になって再度注目すべきことは、“portunhol” の小見出しの後、当時のブラジル人の多くが、単にポルトガル語話者であるという前提で、スペイン語を扱えると思っていることを戒める記述が見られることである。90 パーセント共通の語彙、問題は残りの 10 パーセント、しかも *Falsos amigos* (似て非なる友人たち) と呼ばれる「危ない例」である。数コマの漫画が引用され代表的な例が挙げられている。*Rato* (西: 暫時/ポ: ねずみ。この例は上院でも取り上げられた。)²⁵

ともかく、この記事では、5 世紀の文化的通商的孤立は一朝一夕に消滅するものではなく、5 年間で当時 1 万人に満たないスペイン語教師を 10 万人養成することの実現性にも懐疑的である。なによりも、両国間のサッカーの対戦が友好的なものになるはずがないということが最も強力な論拠である。統合は是としながらも、「しかし多くなく」。スペイン語の導入は、時の経過に委ねるべきというのが結論のようである。²⁶

2. 1 学習参考書

筆者の所見では、両言語話者の他言語の認識に関して、音声的に複雑なポルトガル語話者は、スペイン語会話に対して理解可能であると安易に考える傾向があるようである。他方、読解に関しては、口語と書き言葉の差異が相対的に少ないスペイン語話者の方が文法的理解力が勝っているようである。筆記に関しては、両者とも基礎文法の学習なしに正しい作文は困難であり、出版物を中心とした教材が必要であることはいままでのま

ブラジルのスペイン語教材に関しては、辞書を除き、学習書が一般の書店に流通するようになったのはここ数年のことと見てよいようである。辞書自体、大半は、両言語の語彙を対照し配列したもので、多くの場合、いわゆる単語の綴りの確認が主たる用途であると思われる。近年のスペイン語教材の出版状況について、筆者が収集した資料から所見を述べる。

次の3点が注意を引いた点である。

- 1) オリジナルが英独仏語で、ブラジルにおいてポルトガル語版が作成出版されたものが先ず注意を引く。²⁷
- 2) 商業文作成マニュアルなど実用書の印象が強かったが、受験参考書であることをタイトルにうたったものが2006年に出版されている。²⁸
- 3) スペイン語からポルトガル語の干渉を排除することを目的としている。したがって、ポルトニョールが介在する余地はない。²⁹

3. 結語

2言語文化圏の相互交流と創造活動は、混成語ポルトニョール (portuñol / portunhol) を生み出す環境と併存しうるであろうか。

研究準備段階で、上述のブラジル・アルゼンチンを中心とする南米共同市場での経済的・文化的交流が盛んとなった結果生じた、ポルトガル語圏とスペイン語圏の国境近辺のポルトニョールと呼ばれている混成的現象に注目した。この名称自体が、ポルトゲス (ポルトガル語) とエスパニョール (スペイン語) の合成語である。従来、他言語の要素が混入した純粋でない中間語という否定的あるいは言戲的呼称であったが、当時すでにいわゆるクレオール化やピジン化とも異なる言語として国境地域では社会的認知をされていたことから、研究計画において、2言語の混成現象あるいは中間的形態という視点を言語学的分析の主要な点として設定した。しかしながら、少なくとも本稿の課題である言語教育という視野において、ポルトニョールという混成語は、上述のように、克服されるべき存在である。

他方、新規計画で調査を行う予定のウルグアイのある地方では、2言語文化圏の中間的形態が一種の伝統として継承されているという。2言語文化圏の交流による文化的な創造活動は、それぞれの言語的な純正さを維持しつつ展開していくのか。やはり、何らかの混成的な現象を伴っていくのか。³⁰ 南部南米地域の事例は、東アジア圏にとっても多くの示唆を与え得る今後とも注意を継続していくべき課題と思われる。³¹

¹ 本稿は、海外調査後、研究成果報告として、2008年3月21日（金）京都外国語大学で開催された2008年度日本ポルトガル・ブラジル学会関西支部において行った発表「アルゼンチンにおけるポルトガル語教育」に基づいている。

² ほぼ同時期（2008年3月9日－3月23日）に、重松がブラジル連邦共和国でスペイン語教育の調査を行っている。

³ 両国間の交流は、同じく1990年代に進展した非核政策による緊張緩和が大きな契機となったといえる。歴史的経緯、特に冷戦以降については次の文献を参照。澤田真治「南米南部における信頼醸成と地域統合」（二村・山田・浅香編著『地球自体の南北アメリカと日本』ミネルヴァ書房、2006年：p.49-70）。

⁴ 在ブエノスアイレス・ブラジル大使館 HP によると、関連すると思われる出来事として、Convenio para el fomento del Intercambio de Profesores y Estudiantes（教員および学生の交流促進のための覚書）が1935年5月24日ブエノスアイレスで調印された。なお、それに先行して、1933年10月10日リオデジャネイロ（当時ブラジルの首都）で、知的交流、出版物の交換、芸術交流、歴史・地理教科書の見直しなどの文化面での協定が結ばれている。その後、1960年代半ばから後半に次の協定が結ばれた。すでに両国ともに軍政に連なる変則的な政治社会状況にあったなかで、公的に対外的な文化政策をいかにとらえていたか興味のあるところであるが、今後の課題としたい。Declaración Conjunta Cultural（文化共同宣言） *Firma*: Río de Janeiro, 5 de agosto de 1964; Convenio de Intercambio Cultural（文化交流協定） *Firma*: Río de Janeiro, 25 de enero de 1968; *Aprobación*: Ley N° 17.980 Vigencia: 23 de febrero de 1969; Convenio de coproducción cinematográfica（映画共同制作協定） *Firma*: Río de Janeiro, 25 de enero de 1968 *Aprobación*: Ley N° 22.456 Vigencia: 28 de noviembre de 1981.

両国間で締結した条約・覚書等については、の二国間関係（*relaciones bilaterales*）のページに編年的に一覧できる <http://www.brasil.org.ar/relaciones-bilaterales/>（2011/06/07）。

なお、Instituto de Enseñanza Superior en Lenguas Vivas “Juan Ramón Fernández” には、Instituto Camões のアルゼンチン支部が置かれている。

<http://www.instituto-camoes.pt/lingua-e-ensino/menu-da-rede-de-docencia/centros-de-lingua-portuguesa/americas-central-e-do-sul/327-centro-de-lingua-portuguesa-em-buenos-aires>（2010/06/10）

⁵ Cf. http://es.wikipedia.org/wiki/Agust%C3%A1n_Pedro_Justo（2011/06/0）

⁶ ヴァルガス政権に関しては、2004年に没後50年記念シンポジウムが開催されるなど、ようやく歴史的評価が定まりつつあるといえる。ルーラ政権（Luiz Inácio Lula da Silva 在任2003年－2011）に至るまでのブラジル政治史における記述であるが、次の事典項目が比較的最近の研究に基づき簡潔にまとめられている。ブラジル日本商工会議所編『現代ブラジル事典』新評論、2005年、p.28-p.34（執筆：住田育法）。

⁷ 1970年代までの資料は、FUNCEB（ブエノスアイレス・ブラジル文化センター） www.funceb.org.ar 2008年3月12日アクセスによる。2011年6月時点で、歴史的背景に関する記述のページは見いだされなかった。

⁸ 残念ながら、直接記事を確認できなかった。いずれも FUNCEB の HP 掲載のデータである。

⁹ Cf. いずれも 2011年6月7日最終アクセス。

http://portal.mec.gov.br/index.php?option=com_content&task=view&id=5012; <http://www.abrelivros>.

[org.br/abrelivros/01/index.php?option=com_content&view=article&id=1252:ensino-dos-idiomas-aproxima-brasil-e-argentina&catid=1:noticias&Itemid=2;http://www.ascom.ufla.br/siteteste/?p=27240](http://www.abrelivros/01/index.php?option=com_content&view=article&id=1252:ensino-dos-idiomas-aproxima-brasil-e-argentina&catid=1:noticias&Itemid=2;http://www.ascom.ufla.br/siteteste/?p=27240).

¹⁰ スペイン語の名称は“Seminario Brasil-Argentina Enseñanza y certificación del Portugués y del Español como segundas lenguas”。

http://www.apeesp.com.br/web/index.php?option=com_content&view=article&id=76&Itemid=74
(2011/06/08)

¹¹ アルゼンチン上院で批准された文書、全10項の第1項は次のとおりである：

ARTÍCULO 1º.-Todas las escuelas secundarias del sistema educativo nacional en sus distintas modalidades, incluirán en forma obligatoria una propuesta curricular para la enseñanza del idioma portugués como lengua extranjera, en cumplimiento de la ley 25.181. En el caso de las escuelas de las provincias fronterizas con la República Federativa del Brasil, corresponderá su inclusión desde el nivel primario.
http://www.apeesp.com.br/web/index.php?option=com_content&view=article&id=67&Itemid=70
(2011/06/07)。

ブラジルのHPであるがスペイン語で書かれた関連記事。入学試験科目としてのスペイン語に関する記事（ポルトガル語）なども参照できる。

<http://www.wellingtondemelo.com.br/site/2009/01/portugues-como-lengua-extranjera-en-argentina/>

¹² <http://www.clarin.com/diario/2005/04/17/sociedad/s-959233.html> (2009/04/17) 残念ながら2011年6月現在アクセス不能である。“TENDENCIA: Escuelas, Empresas y alumnos particulares Cada vez es mayor la demanda de profesores para enseñar portugués En nueve escuelas públicas de Capital ese idioma ya forma parte de la currícula oficial.

Colegio zona Palermo solicita profesores de portugués EGB inicial. En los últimos tiempos, este tipo de aviso se multiplicó por cien (sic) en los clasificados de los diarios. La mayor demanda de profesores de este idioma se debe a muchas razones:

En el programa de Escuelas Plurilingües de la Secretaría de Educación de la Ciudad, más del 40% eligió el portugués.

Abrieron últimamente muchas escuelas bilingües en las zonas de frontera.

Aumentó el intercambio de negocios con Brasil, por lo que las empresas hoy también piden profesores. Ya hay más de 6,000 personas que lo estudian en forma particular en todo el país.”

¹³ “Escuelas de Modalidad Plurilingüe” または“Escuelas Plurilingües en Buenos Aires” プエノスアイレス市公立学校における複数言語科目の導入プログラム実施校。英・仏・伊・ポ（独も選択肢ではあるが採用校は不明）が選択言語である。

<http://www.cedom.gov.ar/es/legislacion/prestaciones/educacion/index4a.html> (2011/06/09 最終アクセス)。
FUNCEBの資料によると、2004年の時点で、第2外国語としてのポルトガル語教育の開始学年が、第1学年から、または第4学年からの2種類見られる。

¹⁴ Instituto Camõesは1992年にポルトガル言語文化の世界への普及と振興を目的として設立されたポルトガル政府の外郭団体である。

<http://www.instituto-camoes.pt/> (2011/06/10)。2008年の記事“Ensino da Língua Portuguesa não chega para as encomendas (ポルトガル語教育は需要に追いついていない)”はアクセス不能。

¹⁵ 教育内容の点でも、筆者の知る範囲で、アルゼンチンから日本への留学生で英語力不足のため学習や研究に支障をきたしたという事例は聞かないことから、システムが有効に機能し、組織の発展

につながっているといえよう。

なお、CUIの2011年6月時点での開講言語あるいはコースは次のとおりである。

英・仏・ポルトガル語・伊・独・中・アラビア語・日本語・ヘブライ語・イディッシュ語（2009年から）・ロシア語・ケチュア語・グアラニ語・マプチェ語・バスク語（2011年から）・居住者のためのスペイン語（Español para residentes）・外国人のためのスペイン語（Español para extranjeros）（以上掲載順）。注目すべき点はいくつか見られる。イディッシュ語が近年加えられたが、アルゼンチンは南米最大のユダヤ人コミュニティを有し、ラジオ放送等も行っている。バスク語に関しては、スペインのバスク自治政府に公認されたコースであるが、アルゼンチン社会におけるバスク系移民の存在感を反映したものである。先住民系の言語でアイマラ語は、話者の多くがボリビア領に在住するためか開講されていない。アジア系の言語では、朝鮮・韓国語が開講されていないのが注意を引く。なぜならば、筆者の印象に留まるが、現在、アルゼンチンで最も活発なアジア系移民コミュニティは韓国系の人々だからである。コミュニティ内で言語文化の継承が簡潔しているということであろうか。スペイン語のコースが居住者と外国人に分かれていることも、社会的需要を反映したものであろう。ヨーロッパ系の言語の記載順は、開講規模に対応したものであろうか。英語が最大で次がフランス語、ポルトガル語がイタリア語より先に置かれているのは、単なる偶然であろうか。国民の四分の三がイタリア系とスペイン系で占められると言われるが、前者が後者を上回っている（参照『新訂増補ラテンアメリカを知る事典』平凡社、1999年、p.43; <http://es.wikipedia.org/wiki/Argentina#Demograf.C3.ADA> [2011/06/06]）。

¹⁶ 4課程の名称は次のとおりである：Ciclo Básico (Niveles I a IV), Ciclo de Consolidación (Niveles I y II), Ciclo de Especialización (Niveles I y II), Ciclo de Posgrado。興味深い点は、組織の沿革を示すものであるが、履修証明書またはディプロマがブエノスアイレス大学農学部によって発給されることである。

¹⁷ CUIにおける意見交換と授業参観は、2008年2月21日から29日にかけて行った。センター長（Director）Gonzalo Villarruel教授はじめ関係者各位にお礼申し上げる。

¹⁸ 現在も有効な古典的学術的文献としては、Pilar Vázquez Cuesta y María Albertina Mendes da Luz, “Gramática Portuguesa”, 1961, Madrid (Gredos)が最も古い。また両言語間を対象とした学問的な考察としては、古くは18世紀の前半にラファエル・ブリュトー（Raphael Bluteau, 1638-1734）編「ポルトガル語・ラテン語辞典（Vocabulário Portuguez e Latino, 1712-1728, Coimbra e Lisboa）の補遺に、ある程度体系的な両言語の比較対照研究が見られる。

¹⁹ INSTITUTO CULTURAL BRASIL等の関係機関を含むと、米州16（ASUNCIÓN, BOGOTÁ, BUENOS AIRES, CARACAS, GEORGETOWN (Guyana), LA PAZ, LIMA, MANAGUA, MÉXICO, MONTEVIDEO, PARAMARIBO (Surinam), QUITO, SÃO SALVADOR, SANTIAGO DE CHILE, SAN JOSÉ, WASHINGTON); 欧州6（BARCELONA, BERLIN, HELSINKI, MILAN, ROMA, SUIZA (Zurich)); アフリカ2所在地データ無。その他、代表的連携機関として、Universidad de Salamanca (España)がある。

²⁰ ロカ大統領については、前掲『新訂増補ラテンアメリカを知る事典』p.467「ロカ」（松下洋）参照。

²¹ ブラジルにおけるスペイン語教育の現状については、重松が新規研究計画の中で、継続をしている。

²² 拙稿“O ensino da língua espanhola no Brasil para o bilingüismo entre as duas línguas parentescas,”

1999, AnaisXXI, p.1-p.16 (「ブラジルにおけるスペイン語教育—近親言語間のバイリンガリズム」日本ポルトガル・ブラジル学会紀要 Anais21 号掲載) を参照。主要な資料の一つである 1998 年 8 月 11 日の上院議事録には、数人の上院議員の発言が収録されているが、ブラジルの言語環境の歴史的背景とブラジル人自身の認識を知る格好の情報源である (Diário do Senado Federal, Agosto de 1998, Quinta-feira 12, 12783-12790)。議事録は次のアドレスで検索可能であるが 2000 年 10 月からの記録のみである : www6.senado.gov.br/diarios/Diario ; 本件については現在次のアーカイブのサイトで申請する必要がある :

www.senado.gov.br/senado/secretarias/arquivo/form_at_distancia.asp (2011/06/15)。

²³ 一例を挙げれば、ブラジル側の事情のみが原因ではないが、テレビの放送方式について、アルゼンチン・ウルグアイ・パラグアイの周辺スペイン語諸国が PAL-N に対して、ブラジルは PAL-M または NTSC (日本・米国等採用方式) を採用し、互換性に制約を設けたことなどである。現在、地上デジタル放送の方式がほぼ南米大陸を通じて、日本方式改良した日本・ブラジル方式 (SBTVD-T) に統一されつつあることを考えると隔世の感を禁じえない。参照 : 「PAL」 ja.wikipedia.org/wiki/PAL ; 「地上デジタルテレビ」 ja.wikipedia.org/wiki/SBTVD-T#SBTVD (2011/06/14)。

²⁴ “Em 1494, o mundo foi dividido entre Portugal e Espanha. Aquilo que seria conhecido como Brasil foi separado do resto da América do Sul por uma linha imaginária, traçada pelo Tratado de Tordesilhas. O afastamento durou séculos. Há sete anos, a criação do Mercosul ajudou a espanar essa antiga risca de giz. Agora, um projeto aprovado pelo Senado se prepara para derrubar uma das puças barreiras que o vetusto acordo comercial deixou de pé: língua.”

²⁵ その他の例、スペイン語とカッコ内は言わんとしているポルトガル語 : carne exquisita (carne deliciosa), tapas (aperitivos), embarazada (grávida), vaso (copo)。また、Fernando Color 元ブラジル大統領がブエノスアイレスのテレビ局とのインタビューで犯した直訳の間違いの例を挙げている : es. “duela a quien duela (caiga quien caiga) ” / pt. “doa a quem doer” (「誰がどうあれ」?)。

²⁶ “Cinco séculos de isolamento cultural e comercial não desaparecem de uma hora para outra. Aprovado, o projeto tem até cinco anos para ser implantado. Isso significa que, nesse prazo, o país terá de formar 100000 professores de espanhol. Avalia-se que eles hoje não passem de 10000. A popularização do idioma pode acabar de vez com o que sobrou das rizas históricas que Portugal e Espanha transferiram para suas colônias. Nada, porém, que algum dia transforme um jogo de futebol entre Brasil e Argentina num amistoso. Integração sim, *pero no mucho*. Em tempo: está correto o espnhol.”

²⁷ 原版のみを記す。Carlos Segoviano, *Verbtabelen Spanisch*, Ernst Klett Verlag, Stuttgart, 1988; *L'espagnol fácil - L'essentiel pour écrire: Espagnol / Français*, Larousse, 2002; Juan Kattán-Ibarra, *Teach yourself Spanish - A complete course for beginners 2 ed.*, CENGAGE Learning, 2006.

²⁸ 実用書 2 点 : Ron Martinez, Sandra Di Lullo Arias, *Como escrever tudo em espanhol Escreva a coisa certa em qualquer situação 4ª Ed.*, Rio de Janeiro, 2002; Ron Martinez, Sandra Di Lullo Arias, Victor Ayaka, *Como dizer tudo em espanhol nos negócios Fale a coisa certa em qualquer situação de negócios*, Rio de Janeiro, 2004. 受験参考書 : Sandra Di Lullo Arias, *Espanhol para o Vestibular*, Rio de Janeiro, 2006.

²⁹ 2) の実用書の共著者の一人である Sandra Di Lullo Arias の単著をさらに 4 冊筆者は所有している。特に書名に portunhol からの脱却を謳ったものとして次の 2 点がある : *Guia do Espanhol para quem só fala portunhol* (ポルトウニョールしか話せない人のためのスペイン語ガイド), 2005; *Aprimorando*

seu espanhol Como escapar das semelhanças enganosas com o português (あなたのスペイン語をソフィステイケートしながら いかにしてポルトガル語と紛らわしい類似性から逃れるか), 2010. 実用書、受験参考書とともに、出版社はいずれも Elsevier Editora Ltd. である。

³⁰ 本稿執筆中、ブエノスアイレス FUNCEB で Amalia Sato という日系アルゼンチン人の日本研究者が 2011 年 6 月 16 日に Portunhol をテーマに講演を行う案内を見つけた。この講演は直接 FUNCEB の HP では確認できなかったが、2010 年 12 月にクラリン紙電子版に掲載され、ブログ TOKONOMA に転載された内容に基づいているようである。タイトル “Portuñol como work in Progress. Mejor dicho: Portuñoles como words in progress.” が示すように、Sato は歴史的観点と詩的創造性から肯定的な姿勢である <http://revistatokonoma.blogspot.com/2010/12/portunol-como-work-in-progress-mejor.html> (2011/08/01)。

なお本稿執筆時点で確認できるクラリン紙は、文化欄をまとめた Revista de Cultura Ñ では 2011 年 4 月 14 日付け、本文の方は、2010 年 11 月 1 日の日付になっている。ちなみに、掲載記事によると、10 月 13 日は「ポルトゥニョールの日」とのことである。 http://www.revistaenie.clarin.com/ideas/amalia_sato_sobre_portunhol_0_364163776.html (2011/08/01)。なお、この論説は、2010 年 7 月 14 日ブエノスアイレスの日付であるが、同月 22 日から 24 日ブラジリアで開催された la mesa Narrativas Cruzadas, Congreso BRASA 2010 における発表のまとめである。

³¹ 当初、最終年度としていた平成 22 年度において研究成果を総括し、まとめて発表する予定であった。幸い研究計画最終年度前年度応募基盤研究 (C) 22520559 「スペイン語・ポルトガル語近親言語文化圏間の外国語教育と相互理解の諸相」が採択されたことから、現在、資料の整理分析を行っている文化の諸相を中心として、新規研究計画の進行と並行して適宜具体的成果を発表していく。

